

Exposure / Everlasting



小原一真写真展 - 30年後の被曝に向き合うために

2011年3月から東日本大震災の取材を開始した私は、福島第一原発で働く作業員との出会いをきっかけに原発内部に作業員として入り撮影を行いました。その写真は、「事故後、初めて原発内部の潜入に成功したフォトジャーナリストの写真」として、欧米のメディアに瞬間に広がりました。それが初の仕事となった私は、しばらくの間、新聞や雑誌メディアを中心に、事故後の様相をありのままの形で記録、提示してきました。しかし次第に私は、現実を純粹に切り取るという方法論に限界を感じました。私が撮る写真は、常に現在、しかも物理的にアクセス可能な一点を描き、その写真が未来に起こりうるかもしれない問題、

つまり被曝による長期的な影響などの自分たちからは「見えないもの」に対し、何か機能し得るものではなかったからです。私は、過去によって引き起こされた現在、その先にある未来を発展的に読み解けるような写真表現を求めました。それは、時間や空間的な制限、バイアスや偏見を打ち破って、建設的な思考を想起させるための写真表現でした。

震災から4年が経過した2015年、私は、翌年に事故後30年を迎えるチェルノブイリへと向かいました。その場に立ち、チェルノブイリの現在を知り、私たちが向き合うべき、これからの未来について、そしてこれからの表現方法について考えたいと思いました。